天皇制国家の基底を揺さぶるにいたった。ここに地方社会再編の課題が深刻な体制問題として浮上している。

第一次世界大戦期の日本資本主義の急成長によって，大正期の地方社会は大きな変貌をとげている。経済的・社会的側面で特徴的な点をあげれば，まず，鉱工業生産の急速な伸びの結果，鉱工業生産額が農林水産業生産額を上回るに至り，農業国から工業国への転換が生じている。そして鉱工業の発展を地域的に見ると，全国的には京浜，中京，阪神，北九州の4地域をはじめ東海地方ならびに瀬戸内海沿岸の山陽地方への集中化傾向が進み，現代に至るまで通ずる「四大工業地帯」や「六大都市」の地帯構成の骨格が形づくられた。

また，各府県でも地方中核都市の急激な成長がみられ，とくに人口5万人前後の都市のなかには，大正期を通して人口が倍増するものが目立った。その反面，旧来の城下町や商業都市，在来の織物などの伝統産業を基盤とする中小産業都市の相対的な地位の低下をもたらす傾向もみられた。さらに，こうした鉱工業都市の形成は周辺地域に向けての交通網の発達を促進し，その交通網上に中小都市を発生させていったのであり，このような地域社会における交通体系の新しい整備を含めて，日本資本主義の急成長は各地域を均等に発展させたのではなく，新たな序列関係のもとに各地域社会を再編していったことを意味している。

このような大正期における地域社会の再編過程で，「自治」観念はどのような構造をとったのか，その検証作業を和田は進めているのである。

研究班報告3 分断国家の再統一化の政治経済学的比較研究研究班

東西ドイツ再統一化の中の大学
—フンボルト大学雑感—

安　世舟

昨年12月中旬ベルリンを訪れる機会をもった。その際，再統一化の中にあるフンボルト大学の大きな変容ぶりに接して，この10数年間筆者が同大学を数回訪問したことがあったので，それらの過去の経験を踏まえてそれについて個人的な所感を述べてみたいと思う。

周知のように，ベルリン大学が設立されたのは1810年であった。当時，プロイセン王国はナポレオンとの戦いに敗れ，その屈辱の中で国家の改革にとり組んでいた最中であった。同国の各分野の指導者はなぜナポレオンに負けたのか，その原因は自国の近代化が遅れている点にあることに思い到り，したがってナポレオンを打倒する近道は，プロイセン国を近代国家に改造することであるという認識をもつに到った。こうしてナポレオン支配のくびきから祖国を一日も早く解放させるための国家革新が大胆に遂行されていったが，その一環としてベルリン大学が設立されたことは留意されるべきであろう。大学の創立者はネオヒューマニズムの旗手であったW・フンボルトや哲学者のフィヒテであった。彼らは理想主義的教育理念を実現する場として，ベルリン大学の設立に情熱を傾け，国家権力から自由の「大学の自治」がここで確立されることになったことは有名である。ベルリン大学は近代大学のモデルとなり，あらゆる分野で優れた人材を輩出させて，フランスのパリ大学，イギリスのオクス・ブリッヂ大学と並んで世界のトップの大学の名誉ある地位を獲得することになった。

さて，1954年5月，ナチス・ドイツの敗北と共にベルリン大学も閉鎖され，その輝しい歴史に幕が降された。その後ドイツの東西への分裂と共に，ベルリン大学も東西に分裂する破目に陥っていた。1948年12月4日，ベルリン大学の116名の教員（私講師も含む）が西ベルリンのダーレムにおいてアメリカの資

金援助を得て「自由大学」を設立し，初代総長に自由主義的歴史学者として有名なF・マイネックを選出した。そしてケネデイ研究所を設置し，アメリカ研究のメッカーとなり，さらに政治学部を新設してアメリカ型の大学としてその態勢を整え，発展していった。

これに対して，「自由大学」を設立すべく多くの教員が西ベルリンに移り，もぬけの空となったベルリン大学はウンター・デン・リンデン通りにある校舎に創立者の一人のW・フンボルトの名をとって「フンボルト大学」と改称して再出発することになった。しかし東ドイツの首都の東ベルリンの名門大学であるフンボルト大学は，その創立者が確立した「大学の自由」が許される大学として再出発することは許されなかった。同大学は政権党のドイツ社会主義統一党によって社会主義型大学に改組され，政治的・イデオロギー的にマルクス主義の最高学府として東ドイツの大学のトップの座が与えられることになった。

× × ×

これまで私はフンボルト大学を4，5回訪問したことがある。同大学に興味をもったのは私の研究しているヘルマンル・ヘラーが一時期ベルリン大学に員外教授として約3年間教職にあったという単純な事実に起因する。すなわちヘラーはドイツのワイマール時代の代表的な公法・政治学者として名声が高かったにもかかわらず，社会民主党員であったこと，さらにユダヤ系であったことで大学の門が閉ざされていたが，1928年末にやっとベルリン大学が門を若干開いてヘラーを員外教授として迎え入れ，彼が1932年3月フランクフルト大学に正教授として赴任するまで同大学とかかわっていたからである。私はヘラーがベルリン大学時代，どの研究室を使い，どのような研究生活を送っていたのか，講義録等があるのか等に興味があり，かつてのベルリン大学であったフンボルト大学訪問を在外研究の課題の一つとして考えていた。

1979年2月末，大東文化大学から在外研究を一年間認められたので，研究滞在国を西ドイツに決め，フンボルト大学訪問のチャンスをねらっていた。1979年から帰国する1年間の間，ベルリンを2度訪れたが，フンボルト大学を本格的に訪問したのは1980年の1月末の厳冬の最中であった。当時，ソ連のアフガニスタン介入が本格化し，レーガン大統領の登場と相まって冷戦が再び激化の一途を辿り始めていた時期であったため，西ベルリンから東ベルリンに入るのに大きな不安と多大な緊張が伴った。Sバーンのフリードリッヒ・シュトラッセ駅を出てウンター・デン・リンデン通りにつき当り左側に2・3区画行ったところに目指すフンボルト大学があった。入口のアプローチをはさんで前庭の両側に創立者のフンボルト兄弟の白亜の石像があり，正面のルーフには6体の偉人像が並んで立っており，往事のベルリン大学の偉容は一応再建されていた。建物の中に入って，守衛に用件を話し，広い広間に立ってまずびっくりしたことは，正面の2階の壁に，マルクスの有名なテーゼ「これまで哲学者は世界をいろいろと解釈してきたが，肝要なことは世界を変革することである」(『フォイエルバッハ論』)が金色の文字で浮きぼりにされてかかげられていたことであった。さすがマルクスの祖国であり，社会主義国家東ドイツの最高学府であればこそ，それにふさわしいデコレーション的象徴であるように思われ，成程と納得した。2階に入る階段が左右にあり，左側の階段を上ったところに，創立者で初代総長のフィヒテの肖像画があり，社会主義国家になっても創立者を大じにしていることに感銘を受けた。守衛の人が国際関係局長とコンタクトをとってくれて，不意の来客だが会ってくれるとのことで，2階の右側の国際関係局長室に入ると，局長は1般の東ドイツの人々と違って英国製の高級なセビロを着た紳士で名刺を交換してみると，局長のJ・クリンケルト (Johannes Klinkert) 博士は，法学部の民法学教授であることが分り，旧知の如く法学や法学部に関することをいろいろと意見交換し，1時間ぐらいで失礼した。ヘラーの件は，同局長の言によると，敗戦時の爆撃やソ連軍の攻撃を受け，建物は言うまでもなく，法学部の資料も殆んどすべて灰に帰してしまったし，法学部の教員は殆ど西ドイツや西

ベルリンに移ってしまって，ワイマール時代のベルリン大学法学部のことを知っている人は現在のところいないし，研究室も分らないとのことであった。私の訪問の目的はこのことを知っただけで達成されたことになり，フンボルト大学を後にした。

2度目にフンボルト大学を訪問したのは1983年11月であった。ヘラー没後50周年記念国際シンポジウムが西ベルリンの自由大学主催で開催され，それに参加するために11月1日から1週間ぐらいベルリンに滞在することになった。その間，フンボルト大学を訪れたが，東ドイツの全盛時代であったことも手伝って4年前と殆んど変わっていなかった。

そして3度目に訪れたのは分断ドイツが再統一化を果して約8ケ月が立った1992年7月であった。この時もヘラの縁で再びベルリンを訪れることになった。というのは，ヘラー生誕百周年記念シンポジウムが西ベルリンの自由大学とフンボルト大学の共催で開催され，筆者は報告者として招かれていたからであった。今回のシンポジウムはヘラーが教鞭をとっていたフンボルト大学で行なうことになり，7月11日から4日間，今回は西ベルリンのアデナワー・プラッツのホテルから車で何ら障害なしにフンボルト大学を訪れることができた。ベルリンの壁が消滅し，東と西が自由に行き来できる有難さを痛感し，再統一を心から祈った次第である。

さて7月11日フンボルト大学の前に立ってびっくりしたことは，約9年前と比べて大学がうす汚れていること，そしてこわれかけていることであった。東独の崩壊によってその政治的イデオロギーの最高の教育機関であったフンボルト大学が見捨てられるのは当然の成行とはいえ，そのさびれようは往事のことを知っている筆者にとって，大学人の一人として心痛む思いであった。入口に入って大広間に立ち前面の壁にまだマルクスの言葉が残されているのかどうか関心があり，壁を見ると，東ドイツ時代同様にそれがあるのを発見し，ドイツの再統一化の内容の一端をかい間みる思いがした。しかしそのマルクスの言葉は一部は欠けたままで，その金色ははげており，崩壊した東ドイツ社会主義を象徴するかのようであった。左側の階段を昇って行くと，フィヒテの肖像画はそのままであったが，全体に掃除が行き渡っておらずうらぶれた廃屋のような印象を受けた。ヘラー・シンポジウムはフンボルト大学評議員会室で再統一化後就任した新しい総長のH・フィンク（Heinrich Fink）博士と主催者の一人の同大学法学部長ローズマリー・ヴイル（Rosemarie Will）博士の挨拶をもって幕が切っておろされた。あとで分ったことであるが，40歳台の女流国法学者のヴイル法学部長は，東独時代の末期に人権擁護運動に加担したことで当局ににらまれて解職に追い込まれていたが，東ドイツの崩壊で，新生フンボルト大学法学部の初代学部長に選出されたとのことであった。ところが皮肉にも彼女の夫の同僚教授は審査の結果，解職に追い込まれ，再審を請求中とのことを聞き，体制変換の中にある大学人の浮沈の激しい人間模様を見て，同じ大学人として複雑な思いであった。

3日間のシンポジウムの間，フンボルト大学内やその周辺を見てまわり，西ベルリンの自由大学やその他の西ドイツの大学と比較してなんと汚く，かつ全体がくずれかかっている印象を得た。しかし，裏庭の端に，1944年7月20日のヒトラー暗殺に加担して，ヒトラーに虐殺された抵抗運動者の記念碑が立っていることは新しい発見であった。

最近，フンボルト大学を訪れたのは上記したように昨年の12月17日であった。今度は法学部政治学科の海外地域政治研究（ヨーロッパ）の現地研修の一環としてベルリンに2日間滞在したが，その間，二度フンボルト大学を訪れ，再統一化の中のフンボルト大学の急変ぶりを眼の当りにすることができた。東ドイツ崩壊後約2年が経過しており，1年半前は同大学はうす汚れてまさに崩壊した東ドイツを象徴するかのようであったが，今度見たフンボルト大学は全く違った別の顔を示していた。まず第一に強く印象に残ったことは東欧の社会主義が崩壊し，その余波がフンボルト大学にまで波及している点であった。なぜなら，同大学の前の通りや，入口から建物ま

でのアプローチの両側に古本屋の出店がところ狭しと一杯できており，さまざまな種類の本が売られ，その売主と話して分ったことは，彼ら殆んどがロシアのマフィアかポーランドからの出稼ぎの人々であったからである。さらに前庭の両側に鎮座していたフンボルト兄弟の石像があとかたもなく消えてなくなっていたことであった。修理中とのことであったが，その代わり，建物に向って左側の庭の奥にテオドル・モムゼン（ドイツ帝国時代のベルリン大学を代表する著名な歴史学者）の小さな石像がすえられていたことであった。フンボルト大学の新しい顔なのかと思って聞いて見ると，実は戦前のベルリン大学にはモムゼンの石像が現在のところにあり，元の姿に戻ったとのことである。これを見て，新生フンボルト大学は元のベルリン大学に復元されつつあるのではないかと推測した。であるならば，東ドイツ時代のすべての歴史は消されてなくなってしまうことになるのか，と思った。そして1年半ぶりに建物の中に入ってびっくりした。東ドイツ時代のフンボルト大学の象徴であったマルクスの有名な言葉は恐らくきれいに消されてなくなっているものと思っていたが，私の推測は見事に裏切られ，マルクスの言葉は見事に復元され，新しく金色にぬり直されて，燦然と輝いているではないか。さらに驚いたことは，2階の左側にフィヒテの肖像はそのままであるが，きれになっており，それと対をなす形で，右側に新しい肖像画がかかげられてあった。よく見ると，なんと東ドイツ時代のフンボルト大学の初代総長の肖像画であった。再統一化の中にあるフンボルト大学は，東ドイツ時代の歴史的刻印をすべて捨て去るのでなく，それを積極的にアウフヘーベンして継承しようとしていた。この有様は，東西ドイツの再統一化の内容の一端を象徴するかのように思われた。良く建物を見て回ると，建物はすっかり新装になり，メンザー（学生食堂）も拡大され，食事の内容，価格は西ドイツの諸大学のそれと全く同じものであった。東ドイツ時代のフンボルト大学のおもかげは建物の中では，マルクスの言葉とフンボルト大学初代総長の肖像画を除くとまったくなく，西ドイツの大学と変らぬものに変わっていた。

× × ×

1992年12月17日のベルリン・モルゲンポスト紙によると，再統一が始まった時のフンボルト大学の初代総長のH・フィンク博士の裁判があり，シュタージー（国家秘密警察）との関係があったことで有罪判決が下されたことを伝えていた。1年半前同博士と食事をともにして親しく歓談したことのある筆者にとって，当時の温厚篤実な同博士の姿を思い起すにつれ複雑な思いにかられ体制変換の中にある大学人の苦悩をじかに感じ，暗い気持になった。ちなみに上記のフンボルト大学法学部長ヴイル博士によると，法学部教員の中国際法と憲法の教授は罷免されたが，その他の実定法の教授はそのまま地位が一応保全されたことを聞き，体制変換の中の法学部教員の運命なるものや，その体質を考えさせられたが，今回の訪問で，大学新聞を見ると，教員の間に聴聞会が設置され，教員間の相互審査が続けられ，場合によると旧時代の教授は辞職を勧告されることもあるとのこと，他方，12月初めに改選された三人の副総長の一人に，カール・シュミット研究で有名なミュンヘン大学教授H・ホフマン（Hasso Hoffmann）が選出され，フンボルト大学がかつての西ドイツの大学システムの中に組み入れられつつあることがかい間みられた。また12月中にベルリン市長に提出された，ベルリン市の大学システムの将来像に関する諮問によると，自由大学とフンボルト大学は統合され，重複する学部も整理統合され，自由大学は政治学と古代史に重点を置き，フンボルト大学は一般史に重点を置く大学に改編されるとのことであった。

2，3年後には，フンボルト大学はどうなっているだろうか。名称をそのまま保つのか，両大学を合わせた時，かつての「ベルリン大学」といった名称が復活するのであろうか。